

山田洋次作品集

17

立風書房

山田洋次作品集

7

山田洋次作品集 7



1980年1月10日 第1刷発行

山田洋次作品集 7

山田洋次

発行者——下野博

発行所——株式会社立風書房 東京都品川区東五反田3の6の18

振替——東京五——七四四九三

印刷所——信毎書籍印刷株式会社／株式会社美術版画社

(乱丁本・落丁本はお取替えいたします) 0095—R6307—8909

山田洋次作品集

7

目次

一等寝台車爆破事件

3

片想い

41

泣いてたまるか・子はかすがい

81

父

115

祝 辞

147

遙かなるわが町

185

放蕩一代息子

215

嫁

247

「まじ」ということ

280

解説Ⅱ 宮武昭夫

282

装幀・多田 進
装画・出川三男

一等寢台車爆破事件

脚 演 音 製

本 山 田 よしお
出 池 田 義 一
楽 土 屋 清
作 若 尾 初 男

1961年12月2日放送

東京駅ホーム

列車表示器が八時十五分発月光号大阪行の文字を見せている。

『月光』一号二等寝台車の横腹のプレートに書かれた『月光』の文字。

アナウンスが流れて――

一等寝台車内

両側にカーテンの並んだ狭い通路内は乗客や見送り人、走り回る給仕等で混み合っている。

中程の上段寝台に荷物を置いた新婚旅行の夫婦、松山良夫と悦子、二人を見送りに来た新聞記者市川。

良夫「京都で一泊して、翌日船で別府、それから博多に出て帰りは飛行機……とまあいろんな乗物

に……（照れている）」

市川「（羨ましい）いいなあ、幸せだな、僕もあやかりたいよ」

市川の生真面目な、どこことなくゆったりした態度はあまり新聞記者らしくない。

良夫「そんなこと言って、春あたり突然結婚通知かなんかよこしてあつと言わせるんじゃないか」

市川「（大真面目に否定する）駄目なんです僕は、だいたいが女性にもてない方なのに新聞記者なんていう忙しい商売だろ、恋愛しようにも時間が」

最前から恥ずかしげに、手にした花束の花を指でもてあそんでいた花嫁の悦子、

悦子「まあ……（思わず笑う）」

市川「本当なんですよ、悦子さん……じゃない、奥さん、今日だってまだ松の内だというのに電報で呼び出されてるんですよ」

良夫「（驚く）じゃこれから新聞社へ？」

その時、悦子が声をあげる。

悦子「あら？」

彼女の寝台に、三十がらみの男が荷物を置くとしてゐる。

悦子「慌てて」あの、そこ、私の……」

男（実は中国人）「……」

自分の手にした切符を見ると、慌てて荷物を取り笑顔で会釈した（せしやく）だけで口をきかずに隣へ移る。

市川「コンパートにすりゃよかったのに」

良夫「苦笑」切符をとりそこなっちゃってね……
ちょっと訳もあるんだけど」

と悦子を見る。

悦子、眼を伏せる。

発車のベルが鳴る。

市川「じゃあ、僕」

良夫「わざわざありがとう」

出てゆく市川について良夫、悦子、出口の方

へゆく。

最前から新婚の二人を興味深げに観察していた近くの下段の無精髭（むせうひげ）の男（実は小説家石野）ニヤニヤして見送る。

昇降口

三人、来る。

出逢い頭（あしご）にとび込んで来た男、三人とぶつかる。

男（実は宝石犯）「あ、失礼」

帽子のつばを深く下ろした顔を上げようとせず、そのまま奥へ。

悦子「本当に市川さん、お忙しいところをすみませんでした」

良夫「いずれ帰ってから、ゆっくり」

市川「笑って」うん、じゃあ、幸せな旅行を祈るよ」

良夫「ありがとう」

降りてゆく市川を、二人が笑顔で見送る。

『月光』号の機関車

高らかに汽笛が鳴る。

メイン・タイトル

以下都心を離れてゆく月光号の姿、窓外のネオンの景色等にかぶせてスタッフ、キャスト。

卓上の電話

最前から鳴り続けている。しかし、他の卓上で大声をあげて電話をしている男の声でなかなか聞きとりにくい。

ここは毎朝新聞社、社会部の机の上である。

毎朝新聞社・社会部

大声をあげているのは中年の記者、木下であ

る。

記者の姿はあまり多くない。

ドアが開いて市川が入って来て木下の傍にゆく。

木下「一時間だよ君。一時間早ければ夕刊の最終に間に合ったんだぞ……読者はねえ、毒にも薬にもならねえお正月特集でうんざりしてるんだ。この辺でそういうピリッとした、まあいいや、記事待ってるよ……えっ？ 俺は仕方がねえから今夜は残ってるよ、頑張れよ」

ガチャリと受話器を置く。

市川「遅くなりました。明けてましておめでとうございます。旧年中はいろいろとお世話に……」

木下「苛々して、その挨拶をうけながら」もういい、もういい、正月早々呼び出してすまないがね、実は事件が」

卓上の電話が鳴り、木下は急いで受話器を取り上げる。

市川、自分の机の上で鳴り続けている電話に
気づき、モシモシと傍によって受話器を取り
上げる。

市川「もしもし」

男の声「毎朝新聞社ですか」

市川「はい」

男の声「(興奮した声で) 実は……大変なことが起き
そうなんです」

市川「何ですか」

男の声「今夜、汽車の中に爆弾を持ち込んだ男がいる
んです」

市川「ええっ? 爆弾?」

男の声「そうなんです、時限爆弾です、すぐ手配してく
ださい。えらいことになりますよ、列車は大阪
行急行の月光、最前部の一等寝台に乗っています」

市川「もしもし貴方、お酒を飲んでますね、困りま
すよ、そんないたずらは」

男の声「何言ってるんだ。僕は真剣ですよ、警察へは

言えない事情があるからお宅へ電話するんだ、
すぐ手配してください。お願いです、もしもし
……」

市川、うんざりした表情で、電話を切る。

木下が、立って来る。

市川「(傍に來た木下に) 仕事始めに電話でからか
われましたよ」

木下「何だい」

市川「急行列車に、誰かが爆弾をもって乗り込んだ
から、すぐに……」

木下「酔っ払いが多いんだよ正月は」

市川「はア……」

木下「(苛々して話題を変える) 事件が起きたんだ。
午後五時、紫宝堂の本店でね」

市川「紫宝堂?」

木下「銀座のだよ……知らないのかい、驚いたな
あ、ブンヤのくせに、大きな宝玉石屋さ、そこに
強盗が入ったんだ」

市川「はあ、なる程」

木下「ピストルを二発射って店員一名負傷、被害は宝石と現金で計五百万、ホシは中年の男一名……そんなことだ。君今夜はここにつめて欲しいんだ」

市川「はい」

木下「俺、夕飯食って来る」

市川「どうぞ」

木下、出てゆく。

そこへ、またもや市川の机の上の電話が鳴る。

市川「（受話器を取り上げて）はい、社会部」

男の声「さき程お電話したのですが、列車の方に手配をしていただけましたでしょうか」

市川「ああ、君ですか、困りますよ、そういういたずらは」

男の声「いたずら？……どうしていたずらだとわかるんですか、人命にかかわる問題ですよ、すぐに

『月光』に連絡してください」

市川「僕らも忙しいんでね、一々そういうことは」

男の声「（悲憤^{ひふん}になって来る）そうですか、いいですよ、いたずらだと思うのは勝手ですけどね、万一、本当だったら、どうします、何人かの人の命がなくなったら貴方の社の責任ですよ。僕はこうして真面目にお話ししたんですからね」

市川「じゃ聞きますけどね、その人は何の目的で列車に爆弾など持ち込んだんですか」

男の声「自殺です」

市川「自殺？（笑う）冗談じゃない。死にたきや何そんな手のこんだことをする必要はないじゃありませんか、気でも狂ったんですか」

男の声「（真剣に）ええ狂ってるんです」

市川「ええっ？（ちょっと驚く）」

男の声「気狂いなんですよ、そいつは」

市川「（疑心暗鬼となって）気狂い……？」

食堂・グールメ

新聞社近くの小さな食堂。記者達相手に夜遅くまで、営業する店である。

数人の客の中に、木下、食事をしながら、この食堂の娘、輝子を相手に上機嫌でしゃべっている。

木下「カラットって知ってるかい」

輝子「カラット？　ダイヤモンドの大きさじゃない？」

木下「うん、あれは目方の単位かね、それとも体積かね」

輝子「関心がない」さあ知らない、私なんか関係ないもん（入って来る市川を見つけ）いらっしやい」

市川、深刻な表情で、木下の傍へ来る。

市川「実は、さっき電話が、またかかりましてね」

木下「（顔をしかめる）爆弾か？　すぐ切っちゃうんだよそんな電話は」

市川「はア、そう思ったんですが、一応、念のため

に聞いておこうと思ひまして……それで、その結果を念のために木下さんにお話ししておこうと思ひまして……」

木下「……（むっとした表情で市川をにらみつけると、ライスカレーをムシヤムシヤ食べはじめる）」

市川「（困ったようにしゃべり出す）つまり、精神病院を今日脱走した三十一歳の男がしまして……こいつは普段から自殺することばかり考えている奴なんだそうできて……それも、普通の自殺でなく、世間をあつと言わせるような、新聞や週刊誌に書きたてられるような死に方をしたい、それは走る列車の中でダイナマイト自殺をすることだと、こう考え込んでいるんだそうです。で、今電話をかけた男はその気狂いの小さい時からの友達で、そいつに大変同情していて、二、三年前から、どうせその気狂いは一生

を格子の中で過ごすのなら、思いきってやりた
いことをやらせて死なせてやるのが一番の幸福
ではないかと考えるようになり、遂に実行して
しまった……爆弾を作ってやったのも、一等寝
台の切符を買ってやったのも皆自分だと、こう
言うのです」

木下、ライスカレーの汁を手でぬぐいながら
ジロツと市川をにらむ。

木下「映画の話かい、そりゃ」

輝子、水を持って来る。

輝子「映画にあったわね、そういうの、ジェームス・

スチュアートが出てたわ、飛行機に乗る母さん
の鞆に時限爆弾をのっけちゃうの」

木下「何でそんなことしたんだ」

輝子「お母さんの生命保険目当てなのよ、面白かつ
たわ」

市川「話を続ける」だけど、その気狂いを汽車に
乗せてしまうと、急に後悔し出したんで、新聞

社の力を借りて何とか爆発を未然に防ぎたい
……と、まあ電話で頼んでる訳なんですが」

木下「(ジロツと市川を見る)それで?」

市川「(モソモソと)それでって……こうして木下
さんに報告してるんです、一応はうつだけの手
はうっておいた方がよくはないかと思って
……」

木下「君に言っとくけどね、新聞社にかかって来る
電話の中には随分いい加減なはずらがまじっ
ている、その電話をうまくさばけるようになれ
なきゃ、一人前の記者とは言えないよ。俺は紫
宝堂のタタキで頭が一杯なんだ、つまらんこと
で悩ませないでくれ」

市川「(困り果てて)ですから、僕はその判断をし
た上で一応ご相談したんです。木下さんが相手
にしない方がいいとおっしゃればそれでいいん
です。ただ、万一事故が起きたような場合に、僕
は責任をとれません、その意味で上司である木

下さんの了解が欲しかったのです」

木下「苛々している」しつこいな君は」

市川「しつこいって、別に……（泣きたい気持ちである）」

木下「そんなに気になるならボヤボヤしてないで都内の精神病院に電話してみたらどうなんだ、脱走患者があるかどうかすぐわかるだろう」

市川「はい、そうします」

と、慌てて出てゆく。

輝子、皿を下げに来て、

輝子「市川さんをあまり叱ると、可哀想よ」

木下「驚いて見せる」おや、どういう訳？」

輝子「あの人、真面目な人だもん」

木下「苦笑」そうか、今後気をつけます……それ
でどうなったんだ」

輝子「え？」

木下「映画の話だよ、ジェームス・スチュアートの」

輝子「ああ、あれ、予定の時間に時限爆弾は爆発、

飛行機は乗客と共にボカーン！……」

木下「（苦々しく）チェッ！ 下らねえ」

しかし、木下の表情から一抹の不安は消えない。
い。

警視庁捜査第一課

ここも、紫宝堂の事件で騒然としている。

課長が、記者会見している最中である。

課長「犯行は計画的なものと判断しています。つまり、犯行時刻が丁度客足の少ない時分であったこと、及び、盗んだ宝石類が高価なものに限られていたこと等です。我々としては早期検挙を目ざして現在都内の……」

最前から片隅の机で内村刑事が電話で押し問答をくり返している。

内村「嫌だなあ木下さん、からかうつもりですか我
我を……だってそうじゃありませんか、かけ出

しの記者でもあるまいし、列車を爆発させるなんてそんな馬鹿げたことをあんたが真面目になつて……」

毎朝新聞社・社会部

木下、くさりきつて弁明している。

木下「そりゃ馬鹿げてますよ、わかってますよ、ただねえ、一応念のために連絡してるんだってさつきから言ってるじゃありませんか」

捜査第一課

課長の会見が終わり、記者達はぞろぞろ部屋から出てゆくところである。

内村「とにかくねえ、こっちは新年早々のタタキで頭が一杯なんですぜ、そういう下らないことはいちいち電話なぞしないで欲しいなあ」

毎朝新聞社・社会部

木下、切れかける電話に慌てて怒鳴る。

木下「ですからね内村さん、一応報告はした訳ですからね、あとはよろしくどうぞ、万一てなことがあっても僕の方としては義務は果たしたんですから……すみません、お邪魔して、では」

受話器を置くと苦虫をかみつぶしたような表情で市川を睨む。

市川、情けない表情で何度目かの電話をかけている。

市川「あ、もしもし小林精神病院ですか、こちらは毎朝新聞の社会部ですが、ちょっと変なことをおうかがいしますけど、今日お宅の入院患者さんで、病院をぬけ出したというような人はありませんでしょうか……ない、どうも失礼しました、いえ、別に、ちょっと……」

ため息と共に受話器を置き、電話帳の次の番号を探す。

捜査第一課

内村を中心に三人程の刑事達が談笑している。

内村「(苦笑) かしどうしたもんですかね、この

件は」

刑事A「(笑いながら) あれは一昨年だったっけ、日

航の札幌行に爆弾を仕掛けたって電話があっ

て……」

内村「ええ、丁度今時分でしたよ」

刑事A「馬鹿馬鹿しかったねあの時も……いたずらだ

ろうとわかってもらはん顔も出来ないし」

刑事B「寒いのに羽田まで出かけて大騒ぎでしたね」

内村「(舌うち) まったく、電話で奴は相手がどこ

からかけてるか分からないから仕末に負えない

なあ……こういう時は、……だいたい『月光』

ってのは何時発だい」

刑事B「えーっと、八時十五分ですね、確か」

内村「(時計を見上げて) 八時……何だいもう出ち

やってるじゃないか」

壁の時計は九時を指している。

六郷の鉄橋

下り急行『月光』が轟々と通過する。

小田原警察署

ひんが 人気がほとんどない。

奥まった机で中年の警官が迷惑な表情で電話を受けている。

中年警官「実はですね、今夜箱根方面で博奕^{ばくち}の手入れ

があつてですね、うちの署はみんな応援に出て

いまして……はい……そりゃ警視庁の立場もよ

くわかりますが……しかし頼りない話ですね、

いたずらの電話一本でそんな……はい、無論そ

うしろと言われればそういたします、夕方交替

して家に帰った巡査もおりますし……『月光』

ですな、小田原は九時五十分です……はあ、何